

議員報告書	
1 議員名	南澤 克彦
2 期 日	令和7年11月12日 ~ 令和7年11月13日
3 研 修 先	徳島県 勝浦郡上勝町 株式会社いろどり・合同会社パンゲア 海部郡海陽町 阿佐海岸鉄道株式会社
4 内 容	(1) (株)いろどり 「葉っぱビジネス」 (2) 合同会社パンゲア 「ゼロウェイスト(ゴミゼロ)」 (3) 阿佐海岸鉄道(株) 「DMV(鉄道・バス両用車両)事業」
■研修の目的 (1) はニッチな事業を成功に導いた要因と事業継承のヒントを掴むこと (2) は当市ではゴミ焼却炉の更新が課題となる中、視察地はリサイクル率80%を達成し、焼却炉を持たない選択をしたことから、先行事例に学び今後の当市の選択肢を広げるための情報収集 (3) は DMV が世界で初めて実用化された事例から当市での導入の可能性を探ること	
■概 要 (1) 「葉っぱビジネス」 概要：1980年代後半から始まった料理の”つまもの(飾り葉)”として使われる葉っぱや花木を、地元の高齢者が栽培・採取し出荷する仕組み。品質基準・出荷体制・IT受注システムを整備。関東・関西を中心に料亭や飲食店から信頼を獲得し、年商2億6千万円、シェア60%に達し、人口1,300人の町あって、130軒の農家が出荷する主要産業となっている。 成功の要因： ①前代表 横石知二氏(当初：JA指導員 徳島市出身)の着眼点と執念 従来は料理人自身や弟子が山や庭から調達しており売り物ではなかった“つまもの”に着目し、それが山間部である当地の生き残る道となると信じ、4名の花木農家の説得しスタート。当初は全く売れなかったが、その後、料亭に定期的に通い続け、ニーズの調査を徹底研究し、販路を拓いた。 ②農家を巻き込む仕掛け 早くからICTを導入し、受発注をFAX→PC→タブレットとシステム化を行った。その際、成績・売り上げランキングも可視化し、農家の見栄っ張りな性質を見越し、競争心を刺激する仕組みを構築していた。受注も早い者勝ちでゲーム性があり、楽しみながら仕事ができている。また、おばあちゃんたちを下の名前で呼び、深い観察を通して、期待していること、必要としていることを伝え、生き甲斐を感じながら仕事する環境を作っていた。さらに、自身が市場や客先で得た情報は「きちんとすぐに伝える」ということを徹底していた。 事業承継について： 人材の登用については、いろどりの事業が過疎地振興の成功事例として有名になったことから内	

閤府の「地域社会雇用創造事業(H.21の実績で2億円)」や「地域密着型インターンシップ研修(2010~11)」を活用し、希望者を呼び込み、受け入れ定着を図ってきた。現在の代表者も移住者である。地域おこし協力隊を葉っぱビジネス生産者の後継として募集も行なっている。また短期滞在用のシェアハウス(町営)、長期研修は町営住宅と受け入れ体制も整えている。

■成果または所感等

- ① いろいろ事業やゼロウェイストの取り組みが有名になったことで、先行事例に国などの資金が集まり、さらに事業が進む。地域の活路を見抜き、構想を描き、やり切る“人”の力が大きい。
- ② 移住者や外部人材が軸となり、受け入れ体制が整えられてきている。対外向けに発信する必要があるものは、デザイン・見せ方など含め外部のフィルターを通して構成していく必要がある。
- ③ いろいろ創業者の横石氏も徳島市から農協指導員として来られていた。軋轢もあったと思うが、それを乗り越え、町の主要産業を興し、知名度も高めた姿に同じ移住者として感銘を受けた。

(2) ゼロウェイストの取り組み

概要：元々の町営焼却施設は野焼きであり、県から指導が入り、焼却炉を整備したものの規定量を超えるダイオキシンが検出され、3年で閉鎖となった。代替施設の確保が急がれるなかで、近隣市町との連携は実現せず、県外(山口県)の民間施設へ輸送していたため処理費の増加が課題となっていた背景がある。

高齢化・人口減少による税収減の中、ごみ処理経費の負担増の回避は必須で、コストを要する焼却処理を中心に据えたごみ処理は持続不可能であると判断し、リサイクルを優先し、リサイクルができない場合に限り焼却・埋立処理を選択する方針となった。

現在は45分別をし、リサイクル業者を探し処分している。処理費用がかかるものは町が負担。買取されるものは町の収入となる。分別の結果、年間総量241t中、焼却ゴミは50t(その内おむつが20t)という状況である。

- ・ごみ収集は行なっておらず、町内1ヶ所のゴミステーションに町民が直接持ち込む仕組み。
- ・ゴミステーションでは、各分別ごと処理費用や買取価格、引取先などの情報が掲示されており、見える化が行われていた。
- ・資源化に協力する町民への還元サービス(ちりつもポイント)で、学用品などがもらえる!
- ・生ゴミは電動式処理機などを使い堆肥化。機器購入は自己負担1万円のみで残りは補助金。
- ・持ち込みができない方向けに2ヶ月に一度、運搬支援車が来る(見守りも兼ねて…)
 - 一般ゴミ無料 粗大ゴミ270円/1車
 - 年間委託料30万円/1日4時間、月4日、2人体制 @1,500円 対象44世帯、

・ゴミ処理費用は700万/年、ゴミステーション人件費が1,800万で合計2,500万円

現在リサイクル率80.8%

焼却せざるを得ないものは…ティッシュ・マスク 衛生用品、シューズ、塩ビパイプ など
埋め立てせざるを得ないもの…レンガ・貝殻・塗料の古くなったモノ

■成果または所感等

きれいセンターの更新を迎えるにあたり、大変参考になる事例であった。新聞報道(中国新聞 R7.6.13)によると3市町広域で新設する場合、建設費 208 億、芸北広域単独でも 121 億となる。およそ 30 年の稼働年数として、年間およそ 2 億円ほど負担が増える。

ランニングコストは、一人当たりのゴミ処理経費をざっくり比較すると、芸北広域環境施設組合で 14,113 円 (R3) 上勝町 19,230 円 (2,500 万円 ÷ 1,300 人口)。 諸々の条件を揃えて比較しないと一概には言えないが、建設費を含めて比較すると安く済む可能性もある。

なにより分別して再資源化を進め、環境負荷を低減していくことは、次世代に対する責務でもある。詳細に渡り比較検討し、次の一般質問を通じて、焼却炉の再整備ではない選択肢について議論をしたい。

【上勝町総括】

上勝町の事例は、地域側に信念・想い・軸となるものがあり、そこに外部が共鳴して拡がりを見せているように受け止めた。山間の厳しい環境の中だからこそ、あるもの・できることに集中した結果でもある。 振り返って安芸高田市、条件的には比較的恵まれている分、「コレで生きていく！」と絞り込むのが難しいところがあるが、市域全体でなくとも、地域ごと・業界・団体ごとでも、強い想いが起点となることを実感した。

(3) DMV (鉄道・バス両用車両) 事業

DMV (Dual Mode Vehicle) とは「鉄道も走れるように改造されたバス」という表現が的確かと思われる。乗り物として大変興味深く、観光資源としての効果が上がっている(経済波及効果 年間 2.1 億円)が収支は約 8,813 万円の赤字 (2024) であることがわかった。

阿佐海岸鉄道の鉄道は平坦であったため、勾配について質疑をしたところ、実証試験をしてみないことには不明である、との回答であった。また雪についても北海道では導入を断念した経緯もあり、課題が残ることがわかった。

■成果または所感等

DMVの本格営業運行は世界初ということもあり、観光資源としての価値・魅力があると感じた。二番煎じとなった場合に、どの程度、集客できるかは若干割り引いて考える必要がある。

また当市での廃線あるいは鉄路を活用した運用の可能性については、勾配や雪対応などでの課題を解決してはじめて検討段階に移るべきと感じた。さらに敢えて鉄路をバスが走る必要性があるのか…、既存バス路線も加味し、慎重になるべきである。